

表 2 喘息発作治療薬剤有効性のイメージ調査からみた治療効果得点 (案)

ステロイド静注・ステロイド経口	9点
ステロイド筋注・ β_2 -キサンチン静注	8
β_2 -キサンチン吸入・ステロイド吸入	7
β_2 -キサンチン経口・皮下・筋注 (インターール吸入)	6

特異的減感作療法における副作用に関する検討

1. アンケート調査成績

九段坂病院小児科 島 貫 金 男
 八 木 道 子
 下 田 恵 子
 山 崎 香 栄 子
 宮 崎 安 子
 杏林大学小児科 高 木 学
 阿 部 好 正

〔緒 言〕

特異的減感作療法は気管支喘息の根本療法の1つとして、今日広く行われている治療法であり、その効果については一般に認められているところである。しかし、本療法に伴う副作用についての報告や、薬剤による発作予防療法の応用などによって、特異的減感作療法の対象がかなり厳選される気運になってきている。

私共は、本療法の効果ならびに副作用の頻度を知る目的でアンケート調査を行い、その一部は中間報告として

昭和53年小児慢性疾患(臓器系)に関する研究報告書に報告した。

今回は、集計を終った副作用調査について報告する。

〔対 象〕

昭和44年1月以降当科で本療法を開始した症例のうち2年以上経過した気管支喘息児を対象とした。なお、副作用調査は次の項目について行った。

A. 減感作注射後発作の誘発, B. 注射部位の発赤, 腫脹, 疼痛, C. 注射部位の陥凹, 硬結, D. 湿疹, じ

表 1 各種抗原による特異的減感作療法における副作用の出現頻度 (アンケート調査)

例 数	副 作 用					
	A	B	C	D	E	F
420	52 12.4%	55 13.1%	3 0.7%	22 5.2%	5 1.2%	290 69.1%

注. A: 減感作注射後発作の誘発 D: 湿疹, じんましんの出現
 B: 注射部位の発赤, 腫脹, 疼痛 E: その他
 C: 注射部位の陥凹, 硬結 F: 副作用なし
 症例によっては2つ以上の副作用がみられた。

表 2 使用抗原別による特異的減感作療法の副作用出現頻度

主たる使用抗原	例数	副作用					
		A	B	C	D	E	F
家塵	217	24 (11.1%)	16 (7.4%)	1 (0.5%)	10 (4.6%)	2 (0.9%)	165 (76.0%)
真菌	198	27 (13.6%)	39 (19.7%)	2 (1.0%)	12 (6.1%)	3 (1.5%)	121 (61.1%)
その他	5	1 (20.0%)	0	0	0	0	4 (80.0%)
計	420	52	55	3	22	5	290

表 3 真菌抗原による特異的減感作療法の副作用出現頻度
(カンジダ抗原使用の有無と副作用出現頻度)

使用抗原	例数	副作用					
		A	B	C	D	E	F
カンジダ抗原含まず	91	10 (11.0%)	11 (12.1%)	2 (2.2%)	5 (5.5%)	1 (1.1%)	64 (70.3%)
カンジダ抗原含む	107	17 (15.9%)	28 (26.2%)	0	7 (6.5%)	2 (1.9%)	57 (53.3%)
計	198	27 (13.6%)	39 (19.7%)	2 (1.0%)	12 (6.1%)	3 (1.5%)	121 (61.1%)

んましの出現, E, その他, F, 副作用なし。

〔結果〕

485例より返信が得られたが, 副作用について記載のあったものは420例であった。

各種副作用の出現頻度は表1の如くである。副作用は約30%にみられた。副作用の中で, 副作用Bの局所反応が13.1%と最も多く, 次いで副作用Aの発作誘発が多く12.4%であった。注射部位の陥凹, 硬結が3例(0.7%)にみられたが機能障害を残すほどのものではなかった。

使用抗原別の副作用出現頻度は表2の如く真菌抗原使用群で有意の高値を示し($p < 0.01$), 中でも副作用Bは真菌抗原使用群で多かった。その他の副作用A, C, D, Eは両群間に著明な差はみられなかった。

真菌抗原使用群をカンジダ抗原使用の有無によって比較してみると表3の如くであり, カンジダを含む抗原液使用の場合に副作用の出現頻度は高かった($p < 0.05$), とくに, 副作用Bで大きな差異がみられた。一方, カンジダを含まない抗原液では, 家塵抗原使用の場合とほぼ等しい副作用の出現頻度であった。

治療期間別では, 真菌抗原, 家塵抗原使用群とも治療

1年未満のもので副作用Aの頻度は高く, 副作用Bは治療期間が長くなるに従って高率となる傾向がみられた。とくに, 真菌抗原使用例でこの傾向はつよかった。

喘息重症度別では, 真菌抗原, 家塵抗原使用群とも副作用出現頻度は症状の重いものほど高い傾向がみられた。とくに, 副作用Aはこの傾向がつよかった。局所反応は, 喘息重症度と明らかな関係はなかった。

性別と副作用出現頻度との関係を試みると, 女兒は男児よりも副作用の頻度は有意に高く($p < 0.01$), 中でも局所反応の頻度は女兒において高かった。

〔結語〕

特異的減感作療法に伴われる副作用に関するアンケート調査の結果を報告した。今回の調査では重篤な副作用の回答は得られなかったが, 副作用全体の頻度は約30%であり, かなり高頻度であった。とくに, 局所反応と注射後の発作誘発の頻度が高かった。使用抗原別ではカンジダ抗原使用例に, 性別では女兒においてその頻度が高かった。減感作療法実施にあたって留意すべきことかと考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔緒言〕

特異的滅感作療法は気管支喘息の根本療法の 1 つとして、今日広く行われている治療法であり、その効果については一般に認められているところである。しかし、本療法に伴う副作用についての報告や、薬剤による発作予防療法の応用などによって、特異的滅感作療法の対象がかなり厳選される気運になってきている。

私共は、本療法の効果ならびに副作用の頻度を知る目的でアンケート調査を行い、その一部は中間報告として昭和 53 年小児慢性疾患(臓器系)に関する研究報告書にご報告した。

今回は、集計を終わった副作用調査について報告する。